

資料

地域精神保健活動が精神障害者の生活に及ぼす影響

中村 仁志* 佐藤 美幸*

要 約

病院に通院しながら保健所のデイケアに参加している精神障害者を対象に、精神障害者自身によるデイケアの評価について聞き取り調査を行い、デイケアのあり方を検討した。

今回調査対象は7人で、その内5人がデイケアには勧められるままに参加したと答え、2人が自ら積極的に参加を希望したと答えた。

デイケアに参加をしたことに対して殆どのものが「友達・仲間ができた」ことを参加してよかった点として評価していた。

デイケアのよくなかった点について殆どのものが「ない」、「思い当たらない」と答えていた。

精神障害者自身はデイケアへの参加に積極的な態度を見せなくても、医療・保健の担当者が後押しすることで、社会参加の第一歩を踏み出せる可能性が高くなることが示唆された。

キーワード：地域精神保健活動 精神障害者 デイケア 保健所

1. はじめに

山口県では精神障害者の社会復帰のための援助に、保健所を中心とした地域精神保健活動としてデイケア活動が大きな役割を担っている。こうした精神障害者のデイケア（以下デイケア）やその他の社会復帰のための援助活動では、社会参加を目指す、人間関係の改善、生活の建て直しなどを参加の目的としていた¹⁾。

加藤²⁾はデイケアの治療的機能に対して異論もあるとしながら「安堵感が得られる場所、そして社会性、責任性、自発性などが向上していく場所、と考えている」としている。ただし行政側の見方として「デイケアではその施設を使って指示的・管理的なりハビリテーションを行いなさい、デイケアの有効性を客観的に示さないとデイケアを医療と認めませんよ、と聞いてるように聞こえる」とし、「デイケアに対してはすでに逆風が吹いている」と、その効果について疑問視されていることを危惧している。

デイケア施設は平成14年には、50,000人を対象に、1,000カ所になることが予想されている³⁾。同時に保健所の業務であった精神保健活動が市町村の保健センターの業務へと移り変わる。従って、保健所でのデイケアはその目的や効果だけではなくその役割を明確にし、その必要性（見えない効果を含めて）を市町村に伝えていかなければ、存続するだけの意味のない施設

として行政に見放されてしまう可能性もある。

今回、病院に通院しながら保健所のデイケアに参加している精神障害者を対象に、参加状況、目的の達成状態、生活の変化などと共に精神障害者自身によるデイケアの評価について聞き取り調査を行い、彼らにとっての保健所のデイケアの意義や必要性を検討したので報告する。

2. 方 法

- 1) 研究対象：病院に通院しながら保健所で行われているデイケアに参加する精神障害者のうち、同意が得られたもの7人を対象とした。
- 2) 研究方法：①外来カルテより家族背景、病歴、活動状況などの必要な情報の収集
②対象者に対して参加目的・動機、活動への参加の感想、参加による変化などの聞き取り調査

3. 事例紹介

事例について、デイケアに自ら積極的に参加を希望したものと、人に勧められて消極的に参加したものとを分けて紹介する。

*山口県立大学看護学部

1) 積極的参加の事例：

【事例1】

- 性別：男性 ■年齢：41歳
- 診断名：精神分裂病
- 入院歴：平成3年より4回
- デイケア参加：6カ月
- 保健所デイケア（2回/月）
- 参加動機：病院近くのデイケアの存在を知り、自ら参加を希望した。
- 参加目的：同じ障害を持つ人と話やアドバイスを聞く。
- 参加してよかった点：仲間が増えたこと。自分の意見が言える場がもてたこと。参加すると頭がスッキリする。
- 参加してよくなかった点：困ったことはない。
- 参加することで変化したこと：
デイケアに参加するようになって、デイケアの日が楽しみになった。デイケアのことを思うと、仕事に弾みがつく。
以前は家にこもりがちであったが、今は人前に出てもだれとでも話ができるようになった。
- デイケアに望むこと：
用意されたお仕着せのプログラムに対して多少不満がある。自分たちでも自主的にやりたいし、ある程度のことではできると思う。自分たちで計画して実行することで達成感ももてると思うし、その実感を持ちたい。

【事例2】

- 性別：男性 ■年齢：53歳
- 診断名：精神分裂病
- 入院歴：なし
- デイケア参加：3年
- 保健所デイケア（1回/週）
- 参加動機：知り合いの女性からデイケアのことを知り、自ら保健所に行った。
- 参加目的：知り合いの女性に誘われてはじめた。
- 参加してよかった点：友達ができただけでなく、同じ悩みを持ったもの同士なので、分かり合える。気が晴れる。色々な病院に通院しているものが参加している。
- 参加してよくなかった点：思いつかない。
- 参加することで変化したこと：
参加前は家にいて音楽を聴いたり、TVを見たりして過ごし、人とのつきあいは通院の時ぐらいだった。

た。今は1日のリズムができ、充実した有意義な日を送れる。家事（洗濯・掃除）などもするようになった。積極的になれた。人前で話すことにも慣れてきた。

■デイケアに望むこと：

プログラムがマンネリ化しているので、新しい内容のプログラムがあるとよい。

2) 消極的参加の事例：

【事例3】

- 性別：女性 ■年齢：56歳
- 診断名：躁うつ病
- 入院歴：昭和39年より9回 昭和62年より入院歴なし
- デイケア参加：2年6カ月
- 保健所デイケア（1回/週）
- 参加動機：病院から紹介された。
- 参加目的：同じ障害を持つ人と話し、活動することが勉強になるかなと思って。
- 参加してよかった点：楽しい。心が和む。同じ悩みを持っているもの同士で友達ができた。
- 参加してよくなかった点：具合の悪い人が参加するとけんかになってしまう。
- 参加することで変化したこと：
仕事をしていたが、そこがつぶれ、行くところがなかったときにデイケアを紹介された。やることも、収入もなく生活保護を受けているが、料理を覚えた。小物作りをするなどの楽しみが増えた。
- デイケアに望むこと：
ミーティングでは保健婦が参加しているが、医師の話聞く機会がないため、そうした時間を持って欲しい。3カ月に1回でもそうした時間をとってもらえるとありがたい。

【事例4】

- 性別：男性 ■年齢：57歳
- 診断名：精神分裂病
- 入院歴：昭和50年より3回 昭和62年より入院歴なし
- デイケア参加：20年
- 保健所デイケア（1回/週）
- 参加動機：保健婦・兄に進められた。
- 参加目的：ストレス解消。自分のために行っている。
- 参加してよかった点：ストレス解消ができ、心の

健康が保てる。保健婦とは話をするが、他の話し相手はあまりいない。ただ、仲間がいることで気分的に違う。楽しい。

- 参加してよくなかった点：行きたくないと思ったことはない。
- 参加することで変化したこと：社会性が身についたように思う。
- デイケアに望むこと：担当の保健婦が慣れたと思った頃が変わるのがよくない。デイケアは続けたい。

【事例5】

- 性別：男性 ■年齢：40歳
- 診断名：精神分裂病（接枝）
- 入院歴：昭和63年より2回
- デイケア参加：10年
- 保健所デイケア（1回/週）
- 参加動機：病院から紹介された。
- 参加目的：何となく。今は習慣になっている。
- 参加してよかった点：友達ができた。規則正しい生活になった。穏やかになった。
- 参加してよくなかった点：ない。
- 参加することで変化したこと：以前はものを考えすぎていた。今は悩みがあまりない。
- デイケアに望むこと：バス旅行を増やして欲しい。

【事例6】

- 性別：女性 ■年齢：57歳
- 診断名：躁うつ病
- 入院歴：昭和53年より3回 昭和58年より入院歴なし
- デイケア参加：16年
- 保健所デイケア（1回/週）
- 参加動機：病院から紹介された。保健婦からも誘われた。
- 参加目的：家にいても仕方がないから、出て見ようと思った。
- 参加してよかった点：楽しい。家にいても引きこもりがちになる。気晴らしになる。話の合う友達がたくさんできた。
- 参加してよくなかった点：ない。
- 参加することで変化したこと：家の中でじっとしていた。寝てばかりで、生活に

はりがなかったが、デイケアに通うようになって楽しみができた。その日は早く起きてデイケアに行く。それまで沈みがちだったが、明るくなった。だれとでも話ができるようになった。

- デイケアに望むこと：今のままでよい。回数もよい。長く続けられるとよい。

【事例7】

- 性別：女性 ■年齢：48歳
- 診断名：精神分裂病
- 入院歴：昭和52年より2回 昭和60年より入院歴なし
- デイケア参加：2年6カ月
- 保健所デイケア（1回/週）
- 参加動機：病院から紹介された。
- 参加目的：仕事がしたい。（作業所が中心で週1回はデイケア）
- 参加してよかった点：よかった。作業が簡単。
- 参加してよくなかった点：あまり卓球や、カラオケが得意じゃあない。
- 参加することで変化したこと：嫌なことを忘れられる。今まで人と接することがなかったが、友達がたくさんでき、明るくなった。
- デイケアに望むこと：今のところ満足。

4. 結果・考察

保健所のデイケアは、1965年の精神衛生法改正で保健所業務に精神保健活動が加えられたことで、1968年川崎市大師保健所を皮切りに開始された。保健所デイケアについて菱山⁴⁾は、効果についての吟味、検討の必要性を説きながらも、「地域リハビリテーションの有力な戦力になっていることは明らか」とし、下駄履きで通える身近な存在と訪問看護などの個別サービスと密接に連動している活動として評価している。

今回、調査対象とした精神障害者のうち5人が病院の医師や担当保健婦からの紹介で保健所デイケアの存在を知り、勧められるままに参加したと答えた。それに対して2人が、以前からデイケアの存在を「他患に誘われて」、「地域の作業所仲間からの情報」などによって知っており、彼らは自分から積極的に参加を希望していた。

中村ら¹⁾は、山口県防府環境保健所で行われている

【資料】事例について

事例No	性別	年齢	診断名	入院歴	デイケア	参加動機	参加目的	よかった点	よくない点	変化	希望
事例 1	F	41	精神分裂病	4回 1年2カ月	6カ月 保健所デイケア (2回/月)	デイケアの存在を知り、自ら参加を希望。	同じ障害を持つ人と話をしたりアドバイスを聞く。	■仲間が増えた。 ■意見を言える場がもてた。 ■頭がスッキリする。	■困ったことはない。	■デイケアのことを思うと、仕事に弾みがつく。 ■家にこもりがちであったのが、人前に出てもだれとでも話ができる。	■用意されたお仕着せのプログラムに対して多少不満がある。 ■自分たちでも自主的にやりたい。
事例 2	M	53	精神分裂病	なし	3年 保健所デイケア (1回/週)	知り合いの女性からデイケアのことを知り、自ら保健所に行つた。	知り合いの女性に誘われてはじめてた。	■友達ができたこと。 ■同じ悩みを持ったもの同士なので、分かり合える。 ■気が晴れる。 ■色々な病院に通院しているものが参加している。	■思いつかない。	■1日のリズムができ、充実した有意義な日が増えてきた。 ■以前は家で音楽を聴いたり、TVを見たりして過ごしていたが、家事もするようになった。 ■積極的に話すことも増えてきた。	■プログラムがマンネリ化しているので、新しい内容のプログラムがあるとよい。
事例 3	F	56	躁うつ病	9回 5年2カ月	2年6カ月 保健所デイケア (1回/週)	病院から紹介された。	同じ障害を持つ人と話し、活動をするのが勉強になるかなと思つて。	■心が和む。 ■同じ悩みを持つているもの同士で友達ができた。	■具合の悪い人が参加するとけんかになつてしまふ	■収入もなく生活保護を受けているが、料理を覚えたり、小物作りをしたり楽しみが増えた。	■ミーティングで医師の話を聞く機会がない(3カ月に1回ぐらいでも)
事例 4	M	57	精神分裂病	3回 1年4カ月	20年 保健所デイケア (1回/週)	保健婦・兄に進められた。	ストレス解消、自分のために行っている。	■ストレス解消ができる。 ■心の健康が保てる。 ■仲間がいることで気分的に癒す。 ■楽しい。	■行きたくないと思つたことはない。	■社会性が身についたように思う。	■保健婦が働いた頃に変わる ■デイケアは続けたい。
事例 5	M	40	精神分裂病	2回 4年3カ月	10年 保健所デイケア (1回/週)	病院から紹介された。	何となく。今は習慣になつていく。	■友達ができた。 ■規則正しい生活になつた。 ■穏やかになつた。	■ない。	■以前はもの考えすぎていたが、今は悩みがあまりない。	■バス旅行を増やして欲しい。
事例 6	F	57	躁うつ病	3回 1年	16年 保健所デイケア (1回/週)	病院から紹介された。保健婦からも誘われた。	家にもいっても仕方がないから、出て見ようと思つた。	■家にもいっても引こもりがちになる。 ■気晴らしになる。 ■話の台詞友達がたくさんできた。 ■楽しい。	■ない。	■デイケアに通うようになって楽しみが増えてきた。 ■早起きしてデイケアに行く。 ■明るくなった。 ■たれとでも話ができるようになった。	■今のままでよい。 ■回数もよい。 ■長く続けられるとよい。
事例 7	F	48	精神分裂病	2回 6年	2年6カ月 保健所デイケア (1回/週)	病院から紹介された。	仕事が見たい。(作業所が中心で週1回はデイケア)	■よかつた。 ■作業が簡単。	■卓球や、カラオケが得意じゃあない。	■嫌なことを忘れられる。 ■友達がたくさんできた。 ■明るくなった。	■今のところ満足。 ■今のところ満足。

保健所デイケアの利用者の調査から、こうした活動はまず存在することに意義があり、こうした地道な活動によって、家族の理解と地域精神医療・保健の連携がスムーズになってきたとの感想を持った。

対象者の中では、デイケア参加について、「何となく」、「紹介されたから」、「何もすることがないから」と暇つぶし的で消極的な姿勢で臨み、自分自身では明確な目的意識を持たないものが5人と多かった。そうしたものであっても「(同じ) 障害を持つ人とのふれあいができ、そうした人からアドバイスが聞ける」といった具体的な目的が持てた参加者がいた。さらに、保健婦や兄に勧められたからと消極的な参加から始めた事例3でも、その活動に参加した上で「ストレス解消のため」とした自分なりの目標を持って、参加できていた。

デイケアに参加をしたことに対する評価は、「ストレスが解消できた」、「気晴らしになる」、「規則正しい生活ができるようになった」、「家へ引きこもらずに外へ出られるようになった」などの気分や生活の変化についての意見が聞かれ、殆どのものが「(気持ちが分かり合える) 友達・仲間ができた」ことを参加のよかった点として評価していた。

高野⁵⁾は精神分裂病症例で、退院後デイケアに通所しなかった群に比べ、通所した群の経過が良好であったが、これは「家族との問題や社会的孤立等のストレスが軽減した結果」とデイケア通所の効果を述べている。保健所のデイケアでも十分にその役割は取れていると考えられる。

よくなかった点について多くのものが「ない」、「思い当たらない」と答えていたが、その中で事例3は、「状態が悪いものが参加したときにはトラブルがおこる」困った体験を述べた。

事例7は、「卓球やカラオケなど得意じゃないメニューがある」と馴染めない活動についての批判を述べた。これは3人が今後デイケアに希望することとして、プログラムのマンネリ化に対して他のプログラムの希望をしていることにも通じる。プログラムに対する不満は、積極的に参加した2人から聞かれ、自ら活動しようとして動き出したものにとっては、レベルの違うものに合わせた集団プログラムは、物足りないメニューなのかもしれない。菱山⁶⁾も開催頻度・プログラムの不備を指摘しながら、「(これらを) 補って余りある存在と注目される」とし、デイケアがあること自体がまず必要であることを述べている。

他の意見としては、ミーティングに医者への参加を希

望するものや、「保健婦の交代が頻繁で慣れたと思ったら交代する」と運営上の改善点も指摘された。彼らは自分たちの障害への見通しの信頼性とデイケア運営の一貫性を求めているように感じた。

全体的に見て、デイケアへの参加動機は人に後押しされる形で消極的であり、明確な目的意識は持たなくても、参加することによって友達が増え、明るくなったなど、好印象を持っていることがわかった。もちろん積極的に参加したものでも同様な印象を持っていた。つまり、デイケアに参加している精神障害者は一様にデイケアに参加することはメリットのあることと感じている。

デイケア参加期間が短いものでも6カ月でなおかつ継続しており、最長20年とどの症例も長かった。このことはデイケアに依存もしくは適応しており、本来あるべき社会参加まで行き届いていないように思える。さらに、10年以上参加している3人がいずれも消極的参加の事例であり、こうしたものたちへもう一歩先の社会参加をうながすが支援が行き届いていないのかもしれない。中添ら⁶⁾は、香川県精神保健福祉センターのデイケア通所期間も2カ月から10年と長く、その要因は、「本人及び家族の障害受容のあり方や、社会資源、支援施策の活用の有無と関係がある」としている。しかしながらデイケアに参加する事で、支えられ、ストレスが解消でき、仲間や友達ができ、そして仕事に対して意欲がわくなら、保健所で行われているデイケアを週1回程度習い事のように利用し、なおかつ並行して社会参加するという立場をとっても、何ら問題はないことと考える。

今回の調査では人数が少ないこと、話を聞くことに承諾が得られたものというバイアスがあるにせよ、精神障害者自身はデイケアへの参加に積極的な態度を見せなくても、医療・保健の担当者が後押しすることで、社会参加の第一歩を踏み出せる可能性が高くなることが示唆された。

金地ら⁷⁾は、自分たちの活動の中で、公共施設を借りた出前の保健所デイケアの開設・実施によって精神障害者の理解が地域に広まり始めたことを報告している。地域で暮らす精神障害者が家庭に引きこもらずに、外に向かって行けるような気楽に参加でき、ほっとできる居場所や集団は彼らには必要であろうし、それを支える地域を育てることも保健所のデイケアは一役買っていると考える。

5. まとめ

- ①今回調査対象とした精神障害者のうち5人がデイケアには勧められるままに参加したと答え、2人が自ら積極的に参加を希望したと答えた。
- ②デイケア参加について「障害を持つ人とのふれあいができ、そうした人からアドバイスが聞ける」「ストレス解消のため」と具体的な目標を上げたものがあった。
- ③デイケアに参加をしたことに対して殆どのものが「(気持ち分かり合える) 友達・仲間ができた」ことを参加してよかった点として評価していた。
- ④デイケアのよくなかった点について殆どのものが「ない」、「思い当たらない」と答え、「状態の悪い者の参加はトラブルになる」と1人が答えた。

文 献

- 1) 中村仁志、橋本明、佐藤美幸、藤村孝枝：保健所

における精神障害者のデイケア利用について—防府環境保健所デイケア活動を通して—、山口大学看護学部紀要、第4号、44-49、2000.

- 2) 加藤信：近未来における精神科クリニック、精神科治療学、16(2)、129-133、2001.
- 3) 金子晃一：総合病院精神科を核とする精神科医療改革、精神科治療学、16(2)、119-128、2001.
- 4) 菱山珠夫：わが国におけるデイケアの歩み、村田信男、浅井邦彦編、精神科デイケア、医学書院、1996.
- 5) 高野佳也：精神分裂病の精神症状と社会適応に関するデイケアの効果、慶應医学、77(5)、219-229、2000.
- 6) 中添和代、伊澤英司、酒井むつ子、花岡正憲、デイケア通所者の長期化とその背景、地域環境保健福祉研究、2(1)、40-43、1998.
- 7) 金地喜世子、角井良子、木村千代子、太山由佳：精神障害者が住みやすい地域作りをめざして、地域環境保健福祉研究、2(1)、1-4、1998.

Title: Effects of community mental health work on life of mentally handicapped

Author: Hitoshi Nakamura*, Miyuki Satoh*

*School of Nursing, Yamaguchi Prefectural University

Abstract:

An interview survey was conducted on the evaluation of day care for the mentally handicapped. The evaluation was done by the handicapped themselves who participated in the health center day care while they were making visits to their own hospitals. There were seven participants, five of whom said that they participated in the day care as recommended by their medical staff and two of whom said that they made their own decision to participate. Most of them mentioned "making friends" as a positive result of their participation, whereas most of them did not mention any negative result therefrom. It is implied that there is a high possibility of the mentally handicapped being able to take the first step into social life with support from medical staff them even though the handicapped themselves may not show positive attitudes initially.

key words: community mental health work, mentally handicapped, day care, health center
